

「代表団体の発表をいたします。プログラム五番、高松市立紫雲中学校。」

その瞬間、心の中でガッツポーズをした。吹奏楽コンクール四国大会への出場が決まったのだ。これを目指して頑張ってきた。

一年前の夏のコンクールの二か月前、同じチューバパートの先輩と同級生が辞めてしまい、私一人だけになった。パート内で助け合える存在が誰もいない状態で練習を続けるのかと思うと、なりゆきが不安でやきもきした。

しかし、他のパートの二人がチューバとして一緒にコンクールに出場してくれることになった。本番まであと一か月しかない。休日やコンクールの夏休みは一日中合奏をした。その中でもパートでの練習時間を確保するために、学校がない日は部活動開始の二時間前に集合し、注意されたところを重点的に練習した。毎日そんな練習を続けていくうちに少しずつ先生にはめられるようになってきた。合奏の数も重ね「これはいけるかもしれない」と、部員全員が四国大会出場の可能性を抱いていた。

迎えた本番。隣から聴こえてくるのは互いに支え合った仲間の音、先輩たちのまっすぐな眼差し、先生の一人一人が奏でる音を大切に扱ってくれる指揮。ステージの上にいる全員の気持ちたちが今まで以上に一つになった十分間だった。

そして、香川県吹奏楽連盟のホームページでの結果発表。震える手でファイルを開く。団体名を上から順に追っていく。あった。結果は金賞。その横に「代表」の文字はなかった。あんなに頑張ったのにあり得ない。これは夢なんじゃないかと思った。

コンクールが終わって初めての部活動の日。先輩たちは涙を流していた。これは現実なんだ。私もとても悔しかったが、それ以上に担当の楽器が替わっても嫌な顔を見せずに一緒に練習してくれた二人や、一人となった私を激励してくれた仲間がいるのは幸せなことなんだと感じられた。まだ来年がある私たちだからこそ、そう思えたのかもしれない。この一年間先輩たちが望んでいた四国大会出場に向けて、この大好きな仲間たちと共に頑張りたい。そう胸に誓った。

半年後の冬、少人数編成で演奏するアンサンブルコンテストが行われた。私が所属したチームは地区大会で敗退してしまったが、別の二チームは香川県大会を突破し、四国大会へと進んだ。「このまま私たちも上手くなれば、次の夏のコンクールで四国大会に出場できるかもしれない」と僅かに期待がもてた反面、練習時間にあまり差はなかったのになぜこんなにも結果が違おうのだろうと疑問に思った。追いつくには練習量を増やすしかない。この焦りが、私の吹奏楽魂に火をつけた。普段の部活動に加えて自主練習にも積極的に参加した。また、

吹奏楽関連の雑誌を読んで曲の雰囲気合う吹き方のコツや基礎的な奏法について学んだり、インターネットで和音や調の特徴について調べたりした。

ところが三月の末、今年度最後の演奏会に向けて準備をしている中、入部してから指導をしてくださった顧問の先生が代わる事が発表された。私は先生が何度も口にしていた「部員全員で四国に行きたい」という言葉を思い出し、やるせない気持ちになった。

最後の演奏会の日。演奏が終わり、舞台からはけていった先生の目には涙が浮かんでいた。新年度を迎え、紫雲中学校吹奏楽部は新体制となった。新入部員が入部してくると、どうしても自分の練習にあてられる時間が少なくなってしまう。時間は行進曲のようにどんどんと勢いよく過ぎていき、今年も去年と同じ結果になってしまうのかと思い悩んだ。それでも練習するしかない。私は限られた時間の中で効率よく練習ができるように工夫した。まずは楽譜に記された強弱記号や音楽用語を正確に表現できるように基礎練習を徹底し、不安定なところは同じパートの後輩とだけでなく関連するセクションで合わせた。

コンクール当日に近づくにつれて、本当にこんな練習でよかったのかと不安が募ってきたが、一年間の努力を信じて遂にこの日を迎えることができた。

舞台袖にはこの春に卒業した先輩たちの姿があり、一年前のコンクール後の部活動で見た光景がよみがえってきた。

一つ前の団体の演奏が終わった。次は私たちの出番。「このメンバーで行う最後の演奏かもしれない」という気持ちでステージへ踏み出した。課題曲が終わり続いて自由曲。大きなミスもなくクライマックスを迎え、いよいよ最後のフレーズへ。最後の音はド。純粹で美しいこの音をホールの端に座っている人にも届くように、精一杯思いを込めて演奏した。ホールに残響が響き渡った。やり切った。楽しかった。悔いのない演奏ができた。

夕方に行なわれた、私たちにとつての初めてのホールでの表彰式。賞の色が発表される。

「プログラム五番、高松市立紫雲中学校。ゴールド、金賞。」

よしっ。とりあえずひと安心だ。続いて代表団体が発表される。興奮と緊張で手汗が滝のように出てきた。アナウンスが流れる。数秒の静けさの後、名前が呼ばれた。目標が達成された瞬間だ。

部活動から離れたくなったとき、そばにいてくれたのは仲間だった。隣で笑ってくれる仲間がいたから辛い練習にも耐えられた。四国大会でも今まで支えてくれた先輩たちや先生、家族への感謝の思いを胸に、勇気や幸せを与えられる演奏ができるように頑張りたい。